

# サイジャーナル

月刊  
23-7・8  
第398号

日本サイ科学会 平成23年7月1日発行

本部 〒271-0047 千葉県松戸市西馬橋幸町41-506 郵便振替 00100-2-15344 日本サイ科学会  
電話 047-347-3546 FAX 047-330-4091 E-mail office21@psij.mail-box.ne.jp

<b>東 北</b> 〒981-0904 仙台市青葉区 旭ヶ丘1-36-1 アサビル201号 佐佐木 康 二 ☎ 022 (279) 0908・FAX 022 (274) 0097	<b>中 部</b> 〒503-0981 大垣市松町1290 山 田 哲 三 ☎・FAX 0584 (91) 1192	<b>北 陸</b> 〒920-0864 金沢市高岡町12-45-1F ホリステック健康科学研究所内 佐 藤 禎 花 ☎ 076 (234) 6634	<b>関 西</b> 〒659-0011 芦屋市六麓荘町 (事務局) 9-39 木 村 のり子 ☎・FAX 0797 (22) 6425	<b>九 州</b> 〒862-0976 熊本市九品寺 1-9-7 金 子 輝 夫
--	--	---	--	--

## 七月本部例会のお知らせ

なぜあなたに大きな奇蹟が  
起こらないのか？

東日本大震災にも関連して

講師 古村 豊治氏

いまは、まさに激動の時代。政治や経済は不透明。また天変地異や大災害、事件や難病奇病も続出しています。それら難問に対し具体的な対処策を持つ政治家、指導者、宗教家、科学者、医学者は極めて少ないのです。

そんな指導者たちをあてにせず、自分自身で自分や家族、会社を護らなければなりません。そのために、個々人が自分の本来の力に目覚めなければならぬときが来ました。それには「奇蹟力」とでもいう「力」が必要なのです。

「奇蹟力」は、ただ待っていては起こりません。奇蹟を起こすためには、人間と宇宙の構造を「直感力」を使い、理解しなければなりません。また「意識力」で能動的に対処しなければならぬのです。

3月11日に東日本大震災が起り、原発事故も加わって日本は有史以来の危機的状況にあります。それらへの最新の対処法を、実技を交えて講演します。

なお、参加者全員に古村先生の最新の著作である「成功の宇宙法則」を進呈致します。

前回も大盛況だった古村先生の本部例会でのしばらくぶりの御講演ですので、会員の皆様はご友人・知人をお誘いして、是非ご参加ください。

### ●古村豊治氏のプロフィール

昭和30年早稲田大学商学部卒業。各種会社社長を歴任。船井幸雄先生主宰の直感力研究会講師、高次元波動研究会主宰。時空超越波動法を創出し、今日に至る。高次元研究、フォーチ、I F・テストの実践者として著名。全国でセミナー開催。相談屋本舗運営。

著書には、「究極の自己革新」(博文館新社刊)、「らくらく探査力」(「わくわく意識力」(中央アート出版刊)、「悟り力」(知玄社刊)、「成功の宇宙法則」(致知出版社刊)などがある。

※今回は第三月曜日(祝日)です。

日時 平成23年7月18日(月)

午後1時半～5時

会場 北とびあ9階901会議室  
交通 J R京浜東北線王子駅下車  
徒歩2分、ホーム最北端(赤羽寄り)の階段を下り改札口を出て見える高層ビル

会費 会員 二〇〇〇円

一般 三〇〇〇円

学生 一〇〇〇円

### 今月号の記事

◎七月本部例会のお知らせ

◎御寄付御礼

◎事務局からのお知らせ

◎日本サイ科学会創立35周年記念大会の予告と論文・原稿募集

◎関西サイ科学会七月例会予告

◎第13回宇宙生命研究分科会予告

◎九月本部例会予告

◎十二月本部例会報告

◎第三五五回関西サイ科学会報告

◎第三五六回関西サイ科学会報告

◎念写像の形成過程の分析

※8月は本部例会は休会となりま  
す。九月本部例会予告は3頁に  
掲載されております。

「心を科学する博物館」と  
一般の御寄付御礼  
(6/12受領分まで)

金七千七百円 大川様 風巻様  
金一千円 山田 真理 様  
金一千円 天野 聖子 様

◎事務局からのお知らせと  
お願い

☆本部例会や大会等での運営ボラ  
ンティア募集中

受付での資料配付、講演者スラ  
イド発表時の電灯操作、コンピュ  
ータ操作などのお手伝いをしてい  
ただけませんか。当日の参加費が  
無料になります。

●左記にご連絡願います。  
office21@psj.mail-box.ne.jp

日本サイ科学会創立35周年  
記念大会の予告と論文・原  
稿募集

テーマ「パワースポット」

プログラム(詳細は次号掲載)  
午前10時～12時(敬称略)  
特別講演  
苗鉄軍 佐々木茂美

午後1時～5時  
シンポジウム

前半でパネラーが1人15分位発表  
し、後半でパネルディスカッショ  
ン(会場参加者も含めた質疑応答)  
大会委員長 小牧昭一郎  
パネラー(予定)  
佐々木茂美 苗鉄軍 久保田昌治  
鯨江勇 他

日時 平成23年10月9日(日)  
午前10時～午後5時

※開場は午前9時30分です  
会場 北とぴあ7階第2研修室  
交通 JR京浜東北線王子駅下車

徒歩2分、ホーム最北端(赤  
羽寄り)の階段を下り改札  
口を出て見える高層ビル

会費 会員 二〇〇〇円  
一般 三〇〇〇円  
学生 一〇〇〇円

日本サイ科学会は1995年に  
分科会のサイ実測研究会が、中国  
元極学の張志詳会長を日本に招い  
て東京や長野県で講演会を催した  
ときに、長野県の長谷村(現在伊  
那市に合併)にある分杭峠が元極  
学の基地に匹敵するパワースポッ  
トであるという「お墨付き」をい  
ただいたことがきっかけで、現在  
日本でも有数のパワースポットと  
して分杭峠に多くの人々が訪れて  
おります。

そのことも含めまして、パワ  
ースポットの現状や科学的な立場で  
検討するシンポジウムをプログラ  
ムのメインテーマに致しました。

そこで会員の皆様からもパワ  
ースポットに関する貴重な体験やレ  
ポート、科学的な立場からの検証・  
論文等を募集することになりました  
。それは当日配布される予稿集  
や今年度発行の論文集「サイ科学」  
にも掲載されます。

9月10日までにA4版(40字×  
40行)6枚以内で一太郎かワード  
のデジタルファイルを左記事務局

まで添付ファイル送信願います。  
内容がふさわしいか否かの審査は  
ありますので、ご了承ください。

●原稿送信先

office21@psj.mail-box.ne.jp

関西日本サイ科学会  
七月例会のお知らせ

「オリジナルデザインの正32面  
体図象に潜む驚異の浄化パワ  
ー 日本各地を巡る『みるく』  
奉納紀行に学ぶ」

講師 高尾 征治氏

日時 平成23年7月16日(土)  
午後1時半～5時  
会場 大阪科学技術センター  
六〇五号室

交通 地下鉄四つ橋線本町駅下車  
北へ徒歩5分 靱公園内

会費 会員 二〇〇〇円  
一般 三〇〇〇円  
問合せ0797・22・6425

関西日本サイ科学会事務局まで  
※関西日本サイ科学会の八月研究  
集会はお休みとなります。



## 第13回宇宙生命研究分科会

## 第5回 UFO・オーブシンポジウム

本年もまたUFO・オーブシンポジウムを開催します。優秀な講演者には参加投票によってUFO・オーブ賞を、ユニークな研究者には世話人からマージナルサイエンス賞も・・・。

UFO・オーブ研究に関心のある方は是非お集まりください。またUFO・オーブについてひとこと話したいというヒトもお気軽にいらしてください。

## 内容

○テリー・トフテネス監督が撮影した作品「ザ・デイ・ピフォア・デイスクロージャー」の上映！  
講演者

・山口カール(フォト・アーティスト)「SPIRIT OF MU」  
・中津川 昂(サイキック・リサーチャー)「最新UFO情報」  
・ロン・薄葉(スピリチュアル・ヒーラー)「オーブからのメッセージ」

・田村良一(エネルギー研究者)「改良アダムズモーター現況報告」

・宮本一聖(宇宙・科学・超常現象研究者)「UFO撮影の現場から」  
・アカイ☆コウジ(キヤスター)「エリア5反田から」

・川崎利男(川崎オーブ研究所)「2011年前半オーブ総括」  
・福島原発・セシウムオーブ研究所」  
・森 義光(M総研所長)「関西UFO事情」

・井出 治(クリーンエネルギー研究所所長)「脱原発と第三起電力」  
・森脇十九男(開星論のUFO党党首)「反核開星統合論」  
・宮内輝幸(医師)「一医師からみたスキニーボブの真贋」 ほか

★講演者・講演内容は都合により変更することがあります。その点、ご了承ください。  
(世話人 阿久津 淳)

日時 平成23年7月31日(日)

午前10時30分～午後5時30分

会場 品川健康センター会議室

品川区北品川3・11・22

03・5782・8507

交通

京浜急行新馬場駅徒歩2分  
JR京浜東北線大井町駅東

口から東急バス渋谷駅行で「新馬場駅前」下車

会費 一般 五〇〇円

会員 一〇〇円(日本サイ科学会・サトルエネルギー学会・太陽の会・国際問題研究会会員) ※会員以外の方の参加も大歓迎

## 九月本部例会予告

『3・11 新文明の幕開け』  
『日本人の使命』

講師 鈴木 俊輔氏

先の3・11、東日本大震災は未曾有の大災害であります。しかしこの天譴ともいえる大災害が何ゆえに日本に起こったのでしょうか？ 整然と一〇〇人以上も列を成して食料を求める被災者の姿に、海外のメディアは瞠目しました。

略奪・暴動もないその秩序だった日本人のその姿に世界中が唖然としたのです。そして全ての日本人が今、「自分さえよければいい」という、これまでのワレよしの姿

は払拭され、一億三千万の愛念意識が被災地一点へと集中しました。

はつきりいつて、新文明の幕開けなのです。日本人の偉大な意識が覚醒して、その内なるころから、外側の世界は創られます。大きな和とかがいてヤマトと読ませる、その日本人の使命について古神道・言霊からの観点も含めて再認識したいと思えます。

昨年度までサトルエネルギー学会の事務局長をされていて、この分野に知識の深い鈴木氏の御講演ですので、会員の皆様はご友人・知人をお誘いして、是非ご参加ください。

## ●鈴木俊輔氏のプロフィール

東京生まれ、芝浦工業大学大学院修了 工学修士。日産自動車中央研究所時代には金属合金設計、セラミックス物性、触媒の研究に従事。ついで多機能金属触媒「バイオカルム」を開発(日本表面処理学会柴田賞受賞)。

1996年(有)テクノクエスト 代表取締役社長 バイオカルムの応用研究と音響技術をはじめとする技術コンサルタントとして現在に



よりも早いそうです。その原因のほとんどが開発や乱獲、外来種の持ち込みなど人間の活動にあるわけです。人間は地球生態系の一員として、他の生物との共存を求められているのに、一方的に生物に影響を与え、絶滅の危機を引き起こしている、それはやがて必ず人類に降りかかっている問題だと思います。

日本でもニホンオオカミを怖がってすべて殺してしまいました。その結果現在では鹿や猿等が増えて、様々な問題が生じています。今後地球環境問題や公害問題など環境に関する問題に対して、人類はさらに真剣に取り組む必要があると思います。それは私達の子供や孫達へ物事を継承させたいという誰でも共通の願いからも大切だと思います。

## (2) 体内の環境問題

実は地球環境問題と同様に体内にも環境問題が存在しております。体内にはカビよりさらに小さな生命の世界が存在しています。その世界は多形態の秩序で成り立っていて、そこに疾病の主因も隠されているようなんです。しかし残念

ながら現在の生物学や医学の世界では、その世界を全く知らないか、全く無視しております。当時の研究者達もその事実の証明を試みましたが、既存の権威の前では激しい抵抗に遭い、葬り去られてきてしまいました。その一番の理由はこの小さな生命体の世界が、特殊な顕微鏡でないと見えないということだったと思います。では今日はその世界を皆さんと覗いてみましょう。



## (3) 体内共生微生物と疾病の関係

①暗視野顕微鏡での世界  
病気の原因とは何でしょうか。加齢、偏った食生活、ストレス、睡眠不足、悪い住環境等から体内環境の悪化が生じ、体内に毒素や

老廃物が蓄積します。そこから血液が汚くなる現象となり、それがさらに進むと体内共生微生物の異常が起こるわけです。そして病気の発症が起こるといって、全く新しい発想があります。

パスツールなどが唱えた「病気は病原菌によって起こる」というこれまでの考え方に対して、ペシヤツプやエンダーレンが唱えたのは「疾病の原因は体内環境にある」という考え方があり、私共はこの考え方が正しいのではないかと考えております。

この世界はあまりにも小さすぎて特殊の顕微鏡が必要で、位相差顕微鏡と暗視野顕微鏡があります。暗視野顕微鏡は大変強い光源を乱反射させて、血液の微少な部分まで見えるようにしています。

※暗視野顕微鏡による血液の画像を紹介する

赤血球の大きさは7・5ミクロン(1ミクロン=千分の1ミリ)に対して、血漿の中を動き回る有機体プロテイドの大きさは0・01ミクロンしかありません。

②エンダーレンとガストン・ネサンの理論について

エンダーレンが名付けた血液中の「プロテイド」という有機体を、ガストン・ネサンは「ソマチッド」と名付けております。二人ともこれは生命活動に不可欠なものだと断定しております。

ガストン・ネサンの研究によりまずと、ソマチッドは

1. どんな強酸でも死なない
2. 固形になるとマイナス30度でも、また二〇〇度以上の熱でも耐えられる
3. 5万レムの放射線にも耐えられる
4. エネルギーのコンデンサである
5. ソマチッドサイクルは全部で16形態あり、最初の微少な3形態が健康な状態である

16形態は第一段階の「ソマチッド原型」から、第二段階の「胞子」下原型から、第3段階の「二重胞子」までが非病原性で、第4段階以降、バクテリア形態、二重バクテリア形態、棒状形態、二重胞子を持つバクテリア形態、粒状の二重胞子を持つバクテリア形態、球状の細菌形態、

それが破裂して酵母形態、子嚢胞子形態、子嚢形態、菌糸体形態となり、次々と16のかたちに変わっていく。そして変化の最後の菌糸体形態が壊れると、そこから再び小さなたぐさんのソマチッドが生まれ出て、その後に菌糸状のものが繊維状の葉状体に変化して残される。以上が16段階のプロセスとなるソマチッドサイクルです。

ガストン・ネサンは健康を取り戻すためソマチッドを小さくする方法を考えて、いろいろな薬を試し、楠の樹液から確保したもの(ナフタリン)を薄めて、そけいリンパに打つことで元気を回復させたそうです。

エンダーレンもプロティッドの形態の非病原性から病原性までの様々な変化を観察し、解説しております。結核菌や連鎖球菌、ぶどう球菌も内部から変化して発生すると考えております。

### ③ 当院が観察した比較血液像

※暗視野顕微鏡による、いろいろな病状に対応した血液中のソマ

チッドの形態を解説する

### ④ A W G 治療器について

A W G 治療器は任意波動発生器といつて、松浦優之博士がウイルスを撲滅する目的で開発されました。25年をかけて、世界中の学者さんと協力して膨大な実験を繰り返して、低周波で69種類の有効な周波数を発見しました。M A X 20 ミリアンペア、12・5ボルトという安全な弱電を使用しています。

人類は電気(電子)で照明をし、電車を動かし、テレビで画像を表示し、0と1の信号でコンピュータもできたのに、人間には電気椅子しか使われていなかったのです。人間も電子でできているのに、これはおかしいことです。

これは周波数を合わせることができなかつたからで、有効な周波数が分かれば治療や健康維持にも使えるはずです。臨床実験で述べ3万人以上の治療実績があり、副作用も出ておりません。患者さんは電極を貼って横になっていければいいので、気持ちよく睡眠を取られる方も多いです。

A W G 治療器の効果は、血液環境を良くし、新陳代謝を高める、

体内の解毒作用を促して免疫力を高める、副交感神経に働きかけるのでストレスの解消・軽減をする、慢性的な病気の痛みの改善をし、ケガの痛みについては即効性がある、身体の根本から改善するので、病気予防にもなる、等があります。そういうことから考えると、これは自然治癒力の向上によって病気を回避することができるといわれています。特定の周波数を体内にあてることによって、ウイルスのクリスタルゴブレットの皮膜を内部から破壊し、生体細胞は傷つけないという仕組みです。

ガンに対しては、DNAの損傷部に対して免疫力で修復するように働き、マイナスの電気を帯びた周囲に血液中のプラスのヘモグロビンが集まり、そこに電子を当てることによって、ガン細胞を死滅させるといふメカニズムです。

### ⑤ M R S 施術法について

A W G 治療器は目に見えない電子エネルギーの装置なので、患者さんに不安感が出てくるのですが、これをどのように証明しようかという調べて、ガストン・ネサンのソマチッドを知り、暗視野顕

微鏡で血液とソマチッドを観察することにしましたのです。

暗視野顕微鏡による検査方法の利点は、生きた血液を観察できるので、従来の明視野顕微鏡では見えない血液状態と体内共生微生物を観察できます。

血液の状態を見ることで、患者さんの体調、病状を推測できるところがあるので、病院での検査を勧めめることもあります。

またA W G 施術法による血液の変化を、患者さん本人と共に目で確認することができます。

以上まとめますと、人間は体内共生微生物と共存している、共生微生物は体内環境に応じて変化する、病気の原因は共生微生物とのバランスが崩れたときに発生する、病気は体内環境を改善させることで回復する、体内環境の改善は血液を変えることにより達成できる、血液はA W G 治療器によっても改善できる、施術効果は暗視野顕微鏡によって確認できる、ということです。A W G 治療器の効果が刻々と確認できるのは大きなメリットだと思います。

(4) これからの医療と予防医学について考える

病気になるたときの願いは、早く改善する、痛くない、身辺のダメージが少ない、副作用がない、安く済むこと、それには体内環境の改善、体内における共生の原理を基本として、それに合った手法が重要になると思います。

多くの疾病の原因は、体内共生微生物等がより安定しようとしてロッキングを起こしていると考えられています。体内PHを7・38〜7・40のベストの状態に調整し、適度のエネルギーを与え、最後は共生微生物の力に任せることが重要だと思っております。そのため安全で副作用もなく、安価で効果の大きい方法としてAWG施術法はベストだと考えております。

### 第三百五十五回関西日本サイ科学会研究集会報告

「脳科学と健康…代替医療の疑問解消か!?」  
「4の法則(脳/心/身体/栄養)から考える」

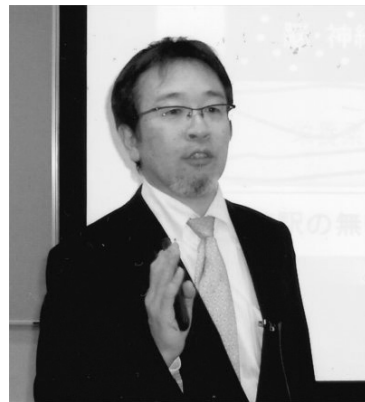
講師 下村 和弘氏  
(健康アドバイザー)

とき 平成23年2月19日(土)  
ところ 大阪科学技術センター

下村氏は1960年愛知県生まれ。名城大経営管理論専攻。1988年名古屋の総合商社に勤務。健康・環境事業に従事、独自に生体電気測定などを始め、1990年頃から健康アドバイザー。現在独立し、健康関連企業などのアドバイザーとして活躍。「生命場の科学」「電子理論」の研究を基に健康アドバイザーとして全国数千人の健康をサポートし、「4の法則/自然の摂理」などを構築。「脳科学と健康」をテーマに大学など全国各地で講演活動中。

厚生労働省が2000年に「健康日本21」と銘打ち、予防医学プロジェクトの推進を掲げてから抜本的な成果の無いまま10年が過ぎたが、現在の「ストレス社会」を代表とする病んだ時代は、明確な解決策もないまま進展しており、心因性疾患や慢性疾患も増え続けている。これらの社会問題化した

課題に対して、新しい切り口で脳科学の観点から斬新な考察を導き出している。



新聞によると中1の鬱病は10%である。また精神科の数は全国で5144、心療内科の数は3092に達している(2005年)。

原因として社会構造の複雑化やじめの陰湿化が取りざたされているが、はじめは昔からあり、最悪と言われる無視もあった。

しかし、ほとんどの場合、学校や会社へは行っており休むことはなかった。現代ははじめ等により出て行けなくなる事で目立ち、社会問題化している。よって、この「行けなくなる」所に原因が隠れている。

また成人病の若年化も進んでいるが、心因性疾患増加と同様の原因があると考えられる。

現代医学の問題点は病気の原因を考えていない。ガンの手術もガンを取ったというだけでガンを治したとは言わない。

私はかつて測定器LFTやBaを使い、年間1000人程度の測定実験を行ってきたが、同じような症状に対して同じような方法で対応しても効果が違う。

そこで、こうした被験者に対して食生活などいくつかの調査を行った結果、健康を維持するためには「脳、身体(細胞)、栄養、心」の4つの条件を満たす事だと気付かされた。健康だけでなく世の中の事象を検証してみると4つの条件からなることがわかり、以来「4の法則/自然の摂理」として提唱してきた。

基本的に脳が身体に信号を送り臓器や組織、ホルモンや免疫機能は働いているが、ほとんどの症状に対し医師は不調を訴える部位の検査に止め、脳を調べようとはしない。

先進医学の現実をみると、日本の医学、特に基礎医学は遅れている。医療先進国のアメリカ政府の腰痛ガイドラインでは「身体の構造変化と慢性腰痛の因果関係は認められない」とある。

福島県立医科大学(2008年発表)の慢性腰痛者の調査によると骨などの異常が見られるのは15%しか無く、原因究明の結果、腰痛の85%はストレスからくる脳の異常と結論付けられている。

海外では、病気の改善には「身心を制御する技術、信念体系の確立、身と心のバランスが大事である」とハーバード大学医学部でも教育され、またブルース・リプトン博士による医学の常識を変えた考え方がある。

それは、信念は細胞を変えるところである。科学とスピリットの橋渡しをする生物学で、遺伝子は単なる設計図にすぎない。「食と思考」が細胞をコントロールし遺伝子の振る舞いを変えるところという驚くべき真実が証明されている。

アメーバから遺伝子を取ってもそのまま元気に生きている。分裂しないだけである。細胞への影響度は食が1に対し思考が10である。

これは私の研究履歴と一致している。腰痛保有者の大半の骨は正常である事も頷ける。

さらに「老化は病気」というのがアメリカの最先端の考えかたでもある。老化という病気の合併症でいろんな病気が起きている。肉体の若さは脳の若さと密接な関係にあることから脳の老化を改善することで結果として病気が消えるというシンプルな考え方である。

●脳と病気の関係について(脳幹の一部を紹介)

1. 酸化、老化、サビ
2. 24時間のリズムの乱れ
3. ストレス、ダメージ  
などが挙げられる。

①視床下部・・・自律神経の中核として免疫、臓器、ホルモン、組織をコントロールしている。

②松果体・・・気エネルギーと関わっているとされ、マスターホルモンの肩書きを持つメラトニンを分泌する。メラトニンは夕方暗くなつてから分泌が始まり、睡眠中3時間くらい続く深

夜3時以降は出にくくなる。夜10時過ぎに起きている3才児が今や半数である。

メラトニンとは

1. 抗酸化物質である。
2. 24時間のリズムや睡眠を促す。
3. ストレスやダメージを緩和する。

このことから、脳細胞の保護薬とされている。分泌は3才から思春期までがピークとされる。

③扁桃核・・・1930年ころから研究されていて一目ぼれやときめき、またイライラ、カチンなどの感情(情動)の時に働く脳だとわかってきた。ストレスの入口と言える。これを除去すると瞬間的な感情の反応が無くなる。使い過ぎると萎縮し、うつ病となる。先の尖っているところがつぶれると統合失調症、精神分裂病となる。

ところで、メラトニンは40才では4分の1から10分の1に減少する。丁度厄年にあたる頃でもある。自律神経失調症、更年期障害、うつ、睡眠障害、かつて成人病と言

われた病気の多くはこの頃から増える病気だった。また60才を過ぎると計測不能レベルまで低下する。

認知症の一般的な原因とされているのは、多発梗塞型とアルツハイマー型として知られ、前者は脳の細かな血管の詰まりによるもの、後者はアミロイドベータタンパクによる脳の縮みとされている。アミロイドベータタンパクの高次構造を修飾することからメラトニンとアルツハイマーが関係している事も報告されている。アルツハイマー患者のメラトニンは著しく減少している。メラトニンは抗酸化作用を持つ強力な神経細胞保護薬である。

メラトニンはフリーラジカルの消去作用があることから脳細胞を守る保護薬と言える。

●血液脳関門について

栄養素は脳には殆ど入らない。血液関門という血管が特殊なフィルターでトランスポーターの存在によるが、メラトニンは抗酸化物質として血液脳関門を通過できる。アメリカではサプリメントとして販売されているが、日本では薬品



分類で認可されていない。メラトニンの実験の多くは牛から採取されていた15年以上前のデータであるため、現在入手出来る化学薬品や植物由来の抽出・乾燥サプリでは同じ効果が期待できない。

●海馬、扁桃核が萎縮・・・痴呆  
おこす脳の器官解析！

1996年3月11日東北大学の研究グループによる発表が朝日新聞に掲載された記事の見出しである。3万人の検査の結果から発表されたにも関わらず、認知症は未だ大脳の病気ということになっていく。扁桃核や海馬が原因なら大脳と違い代謝する組織なので改善の可能性はある。実際、ストレスダメージが緩和すれば扁桃核は再生する。松澤大樹氏のアルツハイマー患者の治療データを見ると、進行が止まる94%、改善が始まる79%、元の生活に戻るものが54%であった。

WHOの警告によると、前立腺ガンや乳ガンは、交代勤務者に多い、それはメラトニンの分泌が抑制されるからである。メラトニンが抑制されると性ホルモンの分泌

が進む。またコンビニや読書による460nmの光(蛍光灯、パソコン、テレビ)はメラトニンを抑制する(産総研)。

生活習慣病が成人病と言われていた、精神疾患も社会問題になっていかなかった時代に我が家で勉強するときは電気スタンドが必要だった事を思い出してほしい。

1958年にメラトニンが発見されてから約半世紀を経て天然で液体のままとる対策としてタルトチェリーにメラトニンが多く含まれることが今世紀に入ってから発見された。「米タルトチェリーにはポジティブな結果をもたらす多量のメラトニンを含んでいる」とメラトニン第一人者ラッセルライター博士。

タルトチェリーの成分は、マルチビタミン、マルチミネラル、マルチ抗酸化物質である。「4の法則」すべてにタルトチェリーは当てはまることになる。

前述の細胞に影響を与えるのは思考10、食1の比率からどんなに素晴らしい物を取り入れてもネガティブなイメージで摂取していても効果が少ない。

1960年代にDrモルツにより発見されたセルフイメージの観点から、イメージ力を活用する事は人生を大きく左右することがわかってきた。スポーツの世界ではイメージトレーニングや、プラス思考で、潜在意識を活用するのは常識である。脳はイメージと現実の区別ができないからである。そしてポジティブなイメージ力を簡単にできる方法は「もしも」をつければよい。「もしも〇〇ができたらどうするんだろう?」と・・・。

そして思考は重要だがその源、脳を守っているのがメラトニンであるということ、天然で液体のメラトニンが取れるのは2011年現在タルトチェリーのみである。

1980年頃から心因性の医療施設が急増している。メラトニンが減少してしまう原因を知ればその原因は明らかとなる。

①夜更かしして明るいところにいると分泌は抑制される。

②非ステロイド系の鎮痛剤、アスピリン、イブプロフェンなどは分泌量を概ね4分の1程度に抑えてしまう。

③電磁波がメラトニンを減らす。1980年頃には蛍光灯の進化で家庭内が以上に明るくなった。さらに家電製品が充実しやがて95年、Windows 95の発売以降ますます夜更かしは増えテレビも24時間放映を始めた。脳の保護薬メラトニン不足の時代到来である。

最後にメラトニンに限らず天然成分の多くが、医療認可されていない理由については成分の認可をとっても天然成分はドイツなどでは特許になるが、日本では法律により構造特許が取れないため、膨大な費用と時間が必要にも関わらず独占販売ができず、開発費用を回収することが難しいからである。

☆ ☆

病は気からとよく言われるが、現代生活における脳の不自然な働きがその要因になっているようである。更に老化は当然自然現象であると思っていたがそれもひとつの病気であるという。我々は気の持ち方で健康で長寿の生活ができるようである。

当日の参加者は会員12名、非会員23名、合計35名でした。今回のカセットテープは2000円(送料込み)です。ご注文は関西日本サイ科学会事務局木村(電話番号0797・22・6425)まで。  
(関西日本サイ科学会会長

河野 明夫)

### 第三百五十六回関西日本サイ科学会研究集会報告

## 「日本人の生き方と21世紀の未来」

講師 重松 昭春氏

とき 平成23年3月19日(土)  
ところ 大阪科学技術センター

古今東西の諸学を学んでも、私達は多くの混乱した意見に支配されて今日まで形成した壮大な地球文明も根本的に変革せずには私達の明日は無いという状況に至っています。

精神世界から「苦」の解決と人

間の進歩をめざした佛教も「縁起」と「空」の二つの次元から私達の現実をとらえようとしながら失敗し、未だに「般若心経」のまともな理解すらありません。

今回は、多年の能力開発の実践的探求から以上の見解に達した重松氏より、問題解決の構図をサイ科学的研究の必要性の問題も含めてお話を伺いました。

重松氏は1930年大連生まれ。能力開発の本質的探究をする株式会社「SLI」代表。意識開発フォーラム「メタワークナウ」主宰。著書「無明の闇を照らす般若心経」(朱鷺書房)

日本の政治家・官僚・学者・マスメディアなどを見ていると、本格的なエリートともいえる人がなかなかいないことに気がつく。

日本には欧米に比べて本格的なエリートを育てるシステムが無いからである。本格的なエリートとは、本格的な生き方の哲学とそれに基づいた戦略を確立して社会に貢献する活動ができる人物をいう。欧米の大学にはそういうエリートを育てるシステムがある。

欧米では本格的なエリートにな

る人物は大学入学後の四年間はまづ伝統的な思想や哲学に触れて生き方の根本を考え、その上で更に大学院で実践的な研究を重ねながら常に戦略的な思考を学ぶ。だから欧米の大学で獲得できる学位の称号はたいいていPhDつまりドクターオブフィロソフィであり、日本語では哲学博士とか学術博士と訳されている。日本にはこのような学位はない。

今の日本の大学で哲学は教養課程の中でほんの一部を学ぶだけであり、哲学は大抵文学部の中の哲学専攻の人がまず学ぶ学問に過ぎない位置づけになっている。

このような差が生まれるのは、日本では欧米の大学の形式だけを残したシステムをつくったからであり、学問的研究の伝統についての深い関心が欠けているからである。

しかも、欧米での学問は、もともと昔から社会の支配階級や王侯・貴族と言われる立場の人が関心をもつものであった。彼らは生き方と戦略を考えることが、自分たちの将来を考えるに当って大切なことであり、その上で、実務については実務的な研究に詳しい人たちが登用するのが常であった。

また、欧米の大学では、思想・

哲学の根本を学ぶのにギリシャ哲学とキリスト教神学の結合したスコラ学を基盤にして、「神」(ゴッド)と称する存在が書いた書物を研究するという形からスタートした。ここにいる「神」の書いた書物とは、一つには「聖書」であり、もう一つは「自然」であった。「聖書」を読み解く技術として尊重されたものは、文法・論理学・修辞学という三つの「自由教科」であった。また、「自然」を読み解く技術としては、天文学・音楽・幾何学・数式を学ぶ四つの「自由教科」があり、両者あわせて七つの「自由教科」(セブン リベラル アーツ)の研究から欧米の大学はスタートしたのであった。

しかも、ここでは「見えない世界」(オカルト・形而上の世界)の研究の伝統の上に、より具体的な「見える世界」(形而下の世界)をとり上げるといって近代までのさまざまな科学研究が発達した。その中で今日、最も古い大学としてはイタリアのボローニャの大学とフランスのパリ大学が有名である。ついこの間のことであるが、パリ大学のシヨシャル教授は

「人間は誤ってつくられた生物ではないが、誤って教育された生物である」と嘆息した。ということとは、長い間に欧米でも本当の人間探求にも問題が生じた事情がうかがわれる。

これに対して日本では、明治維新以後、欧米の大学の形式だけを取り入れた大学教育が生まれた。とはいえ、日本には古くから縄文以来の「古神道」と、途中から伝来した「仏教」が結合して「神仏習合」というユニークな宗教文化が人間の生き方の根幹として形成された。それは自然や人間が一体化して共生と循環をする日本人の生き方を形成し、さらに「共生・共育・共創」を生みだす「場」の文化を発達させた。

ところが、明治維新後の日本の政治家は日本文化のユニークさがないがしろにして、欧米の文化を受け容れるあり方に偏向して「古神道」をゆがめて、キリスト教のあり方をまねて「国家神道」をつくり上げ、他方では徳川幕府の政治の中で重要な役割をはたしていた「仏教」を弾圧して、「廃仏毀

釈」の形をつくりだしてユニークな「神仏習合」の文化を形骸化させてしまった。この流れは、さらに日本が第2次世界大戦で敗北してから、占領軍の洗脳政策を強制されて実質的には独立して自立した国家とはなり難い「日本国憲法」と、日本人に戦争の罪悪感を植えつける「東京裁判」の押しつけと、その上に日本人の精神文化を崩壊させることを狙った「神道指令」によって、いびつな「国家神道」まで放棄させられた。この結果、日本独特の宗教文化は、単なる習俗として続けだけに止まり、日本人の生き方の根本を確立できない現象がどれだけ出現したことが。

とはいえ、日本人の生きている風土のおかげと、日本人の中に古くから受けつがれている多様なDNAと、身土不二の日本食を食べ、古くから日本人の中に受けつがれて多彩に発達してきたハイコンテキストの日本語を日本人が使っている限り、日本人は独特の思考形式を持ち、日本人が形成してきたいわば素質ともいふべきものは、いぜんとして日本人の中に存在し続けてきた。このことよって、

日本は色々なハンディキャップを背負いながらも経済的には驚異的な発達をとげた。



私は長年、人間の能力開発の問題を探究してきた。その過程の中で、私は学習とは何か、教育とは何かを伝統的な見方、考え方にとらわれることなくとらえようとして、人間の可能性は結局、人間の中に働く生命力の発動の問題として、人間とは何か、人間の生き方とはいかなるものかを、探究することから人間の能力開発をとらえようとしてきた。

この探究は、当初、脳生理や催眠をはじめとして、人間の意識とは何かという問題と結びついてな

された。その中で重要なテーマは、人間の自立のあり方を問うことであつた。たとえば、催眠は他者に暗示をかけてもらって、自分の問題を解決しようとして、人間の依存心を生み出し、他方では、暗示をかける人が他者を支配するという傾向を生み出すことで、人間の自立のあり方を阻害することに気がついた。それだけではない。人間の深層意識が、人間の生理・行動を支配する傾向を知り、しかも人間は、自分の存在する社会的あるいは自然的条件の中で、いつも、何かによって洗脳される傾向にあり、そこで得られる「思いこみ」の中で、多くの人が生きていることが明らかになつた。

このことは、この「自分」とは一体何か。何に対して「自分」という言葉を使うのか。その「自分」は、何をしているのか。このような「自分」への問いかけこそは、人間の特質であるだけでなく、問いかけて生み出す意識の本質、秘密とは何か、をもっと深く知りたいたいと思うようになった。このような探求は、いつのまにか、人間の存在の意味、人間の生き方と世の

中の根本構図との関係を知りたいと思うようになり、そのことが、私に「仏教」、とりわけ「般若心経」への関心呼び起こすことになった。そこに仏陀の深い洞察力と智慧を見出さざるを得なかったからである。

このことは、現実の問題として私自身が人生の難問に直面しただけでなく、私に多くの人が、常識では解決できそうもない色々な難問の解決の相談をもちこんできたことと無関係ではない。そして、私たちがこのようになることを、仏陀は、私たちの「無明」によって私たちが「苦」の存在とならざるを得ないことに由来すると解き明かされた。

「無明」とは、私たちが「自分」を知らずそのために「自分」の中に働くこの世の根本理法がわからずそのような「無知」にも気がつかない私たちの意識の未成熟さという。

仏陀は、この世の根本構図を「縁起」と「空」の二つの視点からとらえることを示された。「縁起」とは、この世の現象が多くの変動す

る「縁」の和合によって生成・消滅することを行い、この世の根本構図を、具体的・現象的な視点からとらえる認識を示す。これに対して、「空」とは、この世の根本構図を「縁起」を超える抽象的・本質的視点からとらえる認識を示す。私たちの存在する現実を、この両方の視点からとらえることによって、この世の根本構図を仏陀は明らかにされたのである。

「縁起」と「空」の関係をたとえれば、「空」は大きな川の流れを示し、「縁起」はその川の流れの中で、多数の泡が生成・消滅することに相当する。この「縁起」という現象として出現する個々の泡は、大きな川の流れ全体からみれば皆一つにつながって個々の泡としては存在しない。このように見ることができれば、「空」自体の中には「縁起」上の現象は存在せず、「縁起」上生ずる「苦」も存在しない。

そして「縁起」も「空」を基盤として成立することがわかる。私たちにこのような可能性を自覚させ、私たちの意識を成熟した状況にもたらず智慧として佛教は「般若心経」において「般若波羅密多」

と称する「呪」（ことだま）の実践を説いている。このことを「般若心経」の叙述に素直に従った実践によって体験することができれば私たちにとってこの世に出現するすべての問題は、本来解決を求めていて、これらの問題を通して私たちは人間として進歩する道を歩むことができるという認識に到達する。

ここで必要なことは「般若心経」の叙述にできるだけ素直になつて接してその主題と構成を捉えることと私たちの中に働く意識についての「サイ科学的」理解である。けれども、これまで日本中に示された「般若心経」の理解は、残念ながら「般若心経」を尊重せず勝手な「思い込み」でなされているものばかりで「サイ科学的」理解にもあまりにも無知過ぎるものが多かった。私たちの意識についての「サイ科学的」な理解については今日では世界の医療のトップジャーナリストとして著名なリン・マクタガードが「フィールド・響きあう生命・意識・宇宙」（インターシフト）において「量子真空」の問題として「ゼロポイントフィ

ールド」の研究を紹介していることに注目することができる。

この実践的な探究によって私たちは「自分」と称する存在が量子的レベルから原始生命体・一片の生きた細胞・脳細胞・そして個としての肉体的な存在を超えて、この世のすべてと一つになり得るいわば全宇宙的な全体的な「自分」にまで認識を広げ、深めることができる。そして「縁起」と「空」の関係は、この世の全存在において色々なレベルにおいて「自己相似的」（フラクタル）な関係として捉えることができる。このような認識に至れば、私たちは「なぜ、人を殺してはいけないのか」「なぜ、盗んではいけないのか」「なぜ、嘘をついてはいけないのか」という問題に対しても深く解き明かすことができる。このような認識は私たちが、この世で何をしているのかも深く捉えることができる。

とはいえ現実の私たち日本人はたいがい今のところ「自分」とは何かについて十分な自覚をしていないとはいえない。そのため「縁起」上の個としての「自分」を「自分

と見る「思い込み」から開放されていない。その当然の帰結として私たちは「エゴイズム」に支配され、敗戦以後二十有余年を経過する間に日本人としての「自分」の生き方を自覚していない状況にある。そして日本人の「素質」を維持しながらも、日本人としては劣化した状況にあり「縁起」上の注目すべき「縁」である「マネー」に依存し、「マネー」に支配される人生を送っている。

しかしこのことは何も日本に特有の現象ではなく、今日地球上の全体に見られる。この状況はるか昔からこの地球上において「マネー」という便利なものを中心に置いたシステムを構築して、このシステムの中にできるだけ多くの人を参加させて、この世を支配しようとしてきた国際金融資本の画策によって生み出された。

私たちが今日この地球上に築き上げてきた文明は、一方ではこの地球自然の恩恵にあやかりながら、他方ではこの地球自然を食いつぶし、そこから多くの盗みをしながら、それを地球自然に返すことなく続けてきた文明でありしかもこ

の文明をこのまま維持し発展させることはそのことよって文明の基盤を破壊し、やがて文明のありかたを崩壊させかねないという自己矛盾の活動を続けしかもその中核にマネーを中心にしたシステムよって地球全体を支配しようとする国際金融資本の活動を無視することはできない。

またこの世の人間のあり方を探究する哲学・思想は象徴的には近代の欧米において「自由・平等・友愛」という理念を生み出したが、人類が「自己探究」を深めない限り「エゴイズム」の支配よって「自由」と「平等」は対立する傾向を招き、社会体制的には「自由」を象徴する「資本主義体制」と「平等」を象徴する「社会主義体制」の対立を地球上に生み出した。

しかしながら現実の問題としては「ロシア革命」よって象徴的に生み出された「社会主義体制」は国際金融資本の援助があつて実現したものであり、地球上における「資本主義」と「社会主義」の対立の構図は国際金融資本の地球支配の両建て戦略にほかならない。この全体の傾向は結局、仏陀の眼

から見れば私たちが「自分」を知らず「エゴイズム」に支配される限り「縁起」に依存し「縁起」に支配される傾向として、私たち人間のあり方が、今だに「苦」から解放されないという状況を生み出していることになる。

もし私たちがこの問題を解決しようとするれば、私たちは「自分」を知り私たちを生かす自然と一体化し共生・循環のあり方を構築する必要がある。それには日本人の生き方の可能性が、日本だけでなく地球全体の問題を解決する基盤となることを自覚することが望ましい。日本人が昔から実現していた「神仏習合」の生き方を既に分析した佛教の本格的な理解をベースとして、もう一度構築し直し、その中で私たちの新しい文明を作り上げる根本問題として、地球・自然を食いつぶすことなく、自然と共生・循環できる「自然エネルギー」の活用を図ることが望ましい。その点で既に紹介した「ゼロポインタフィールド」のエネルギーの活用を自覚しているスチーブン・グリア博士の「UFOテクノロジー 隠蔽工作」(めるくまー社)に私

たちは注目することがができる。

☆ ☆

今回は般若心経を基本に広く日本人の生き方を説いて頂いた。日本人の特質に想いをいたし、充実した人生を送りたいものである。

当日の参加者は会員14名、非会員19名、合計33名でした。今回のカセットテープは2000円(送料込み)です。ご注文は関西日本サイ科学会事務局木村(電話番号0797・22・6425)まで。

今後の予定

7月16日(土) 高尾征治氏「オリジナルデザイン」の正32面体図象に潜む驚異の浄化パワー 日本各地を巡る『みろく』奉納紀行に学ぶー

9月17日(土) 井出 治氏「未知エネルギー」の研究とチャネリング」  
10月15日(土) 阿久津 淳氏「20

12年問題とサイ科学的進化」  
『PSI: Scientific Evolution & 2012』

(関西日本サイ科学会会長

河野 明夫)



(2) この時のD2は3.82以下になる。また、(3) 指尖脈波のカオス解析からは、交感神経並びに副交感神経が、同時に、次第に増加している。しかし通常人(非訓練者)の場合には、リズムは無く、D2はより大であり、(3)に見られる様な変化は存在しない。なお、以上のD2は、別に、相関次元とも言い、カオスを生み出すに必要な変数(雑音)の数を意味している。また(3)は、集中とリラクスを同時に進行させる事を意味している。D2の減少傾向は、雑念の数(変数)を減少させる事により意識を集中させ、そして次第に零意識に近づける。リズム変動後の、次のD2の増加は、無意識から来る変数(雑音)の増加を意味するのであろう。また、通常人も訓練すれば(1)~(3)を得る事ができる事が判っている。

### 5) 未知現象の発生源

念写の発生には零場が必要である。その条件として(1)既存のサイ情報(素粒子群)が残在していない更地(さらち)の場の局所。これは「無」や「零」を意味しているので、新たに、様々な素粒子群(例えば、PSI-spinペア等)が参入・存在し得る。(2)零場の中の零点を境にして、どんな現象でも産出・変換し得る。例えば右旋回と左旋回、拡大と縮小、(+)方向と(-)方向、実と虚、現世と来世、精神と物質、その他。これを、念写の場合でいうと、様々な画像(人物、風景、建築物等)や色彩、書や数字等(サイ情報)への気エネルギーの変換と生起を意味する。具体的な一例として、零場を造る場合を検討する。例えば(+100)+(-100)=0。単なる数字でなく、要素がぶつかり合う実態の有る場合を想定する。つまり、これに実体の(+10)+(-10)=0等を追加して、

$$(+10) + (+100) + (-10) + (-100) = 0 \\ \dots \dots \dots (1)$$

これより、零には多種多様な場合(内容)の有る事が判る。いま(+100)を電子、(-100)を陽電子とし、(+10)を陽の微細粒子((+)オーラ等)、(-10)を陰の微細粒子((-)オーラ)とする。式(1)を書換えてベクトル表示する。電子のベクトル(↑)を(+)とする。この電子

には「反対方向のベクトルの(-)微細粒子(↓)」。此と対になる陽電子(↓)には「微細粒子ベクトル(+)の(↑)」が組み合されている(例、超心理学研究、13-1、pp.8-17、参照)。これらの素粒子を加算させる事により、より安定な状態の素粒子群が形成される事になり、これらの集団を特定な素粒子群(サイ情報、外気)と仮称する。気が集積している場所、つまり「気場」では低線量放射線(ガンマー線)の高い値、通常は0.035~0.045 $\mu$ Sv/hr程度なのに、0.09~0.12 $\mu$ Sv/hrもの値が測定されている。

量子論によると、ガンマー線等の高エネルギーをミクロの真空中に放射すると、電子と陽電子が対発生してくる、と言う理由から(断層付近の)気場では電子の反粒子としての陽電子の存在する確率が高く、これが未知現象の起こり易さに関係してくる。この陽電子が空気中の電子と作用し合って安定なスピン対になり、此に零意識形成時に生体から放出される極微細粒子(エーテル層、アストラル層等)等と作用して、さらにより安定なPSI-pair群集団を形成する事になる(例、式1)と考えている。なお気場以外でもバック・グラウンドとしての上記の低線量放射線は存在しており、これが式(1)のそれぞれに相当する部分を担当する事になる。このサイ情報(外気)がスカラー波(零の粗密波)を搬送波にして、チャクラ等から放射された微細素粒子群(サイ情報、PSI-spinペア群)と連絡し、共振(共鳴)して、未知現象が生起するのであろう。

零場を形成させる手法は、気(サイ)のカオス・アトラクターが描く軌跡の密度増大に基づく消失(干渉相互作用による消失、窓、空白部、零)を用いる。他方、スカラー波の周波数成分は様々であり、スカラー波は対流や相互作用のある場所・場合に生成し、(+)と(-)が互いに打ち消し合って零となり、粗密波(縦波)として存在する事になる、と判断している。

### 3) 暗箱内に湧出した光

宮内力、福田豊らはサイ能力者（超能力者、MK）を対象にして、1975年1月～1976年9月の1.8年間、322回にわたって実験を実施した（念写・念電現象の物理学的研究、1977、念写協会）。光センサーにはフォトセル（太陽電池）、記録にはペン・レコーダーを用いているが、現象の有無を主目的にしたので記録は短時間（1秒以内）が多く、実験成功率は約50%であった。さらにポラロイド・フィルムに念写像が写る事とペン・レコが同時に動く事から、暗箱内に量子光が湧出している。フォトセルの一個を閉（黒ビニールで包み込む）、一個を開（通常）にした実験から、暗箱内で光が湧出する事実、そして湧き出した後の光は、影を造る通常の光である事等を確かめた。

一方、暗室内での実験において、放心状態（うつら、うつら寝る）の時、ペンレコの（+）方向微小振動の中に（-）方向の変動が現れた。つまり、フォトセルに負（-）方向出力が現れる様になった。これらが端緒となり、逆方向にも光を湧出させる事が出来るようになった。宮内らは、別に、ポラロイド・フィルム「写れ」、ペンレコ「等閑視」の時は、ポラロイドのみに像が出た（光の湧き出し）が、ペンレコは動かない。これの逆も可能であった。なお2個のフォトセルの受光面を腹合わせにして黒ビニールテープで包み込み、室内光でテストした時、片方に正、片方に負の電流が生じている。

これらから判断して宮内らは能力者の注意の範囲内に対象物が入った時にのみ、サイ「気」が存在させられる（光湧き出し）空間が成立する、と判断した。筆者らのほぼ同種類の実験の場合にも、フォトセルの順方向ならびに逆方向起電力の発生、ネガおよびポジ像の念写像の生起等、並びに暗箱内に指向性の極めて強い光が存在している実験結果を得ている。それらは、気が素粒子群類似で、コヒーレンシーの強い光である事に関係するのであろう、と考えている。

他方、能力者は、はじめは「写れー」と強く、大きく、気合いをかけて統一送念したが、慣れると、腹気合いで、ただ「うん」と呼吸・送念するだけでテストが出来る様になった。

以上の研究結果から、ごく短時間に集中して気を放出している事情からみて、パルス状に湧出させた光は、素粒子群類似で、位相の揃った状態（例、PSI-pair）で、被験者の意念（ASC）に指示されて、出現してくるものと考えている。

### 4) 念球発生と意識変化

佐々木茂美、小川雄二、苗鉄軍ら（1978～2010）はフォトセル（太陽電池）とデジタルメモリ（メモリースコープ）、カオス解析装置等を用いて暗箱内に発生した念球（光子群）の発生、諸変化、性質等を調べた。念球（光子群）はゆらぎを伴っており、複雑系としてのカオス解析を実施することによって、その性質を知る事が出来る。念球（光子群）のカオス・アトラクターはレスラー系の低次元決定論的なカオスとして表示されており、アトラクターのフラクタル次元D2は、 $D2=1.94\sim 2.25$ であった。

急速でしかも大量に気（サイ）を放出し、未知現象を出現させる為には、呼吸をコントロールする等の手法を用いて（自律神経変化）リラックス集中の状態、つまり知性や理性を薄めて変性意識状態（ASC）になり、そして強く意念する事が前提条件になる。具体的には、雑念を取り去り、集中を強めて意識と無意識を拮抗・対峙させて零意識（未知現象生起時のASC）にするとよい。

気（サイ）を放出させる為の音声的、意識的な条件設定の一例をみる。体内の背骨付近に中脈と言われる気の通路がある。その上に7個（体内は6つ）の脈輪（チャクラ、気エネルギー・センター）があり、体内の気の調和を果たしている。例えば、「六字真言」等、「オン」「マ」「ニ」「ペ」「メ」「ホン」等を発声し、その音声の振動を体のチャクラへ響かせて共鳴を起こす。励起させた共鳴振動は各チャクラの振動となり（固有なカオスの振動数）、これが発生源となり、体の内外に拡散して、気エネルギーの波動となる。訓練上達者の実験結果をみると、六字の音声の順番①-②-③-④-⑤-⑥に対応して、(1)フラクタル次元D2は、 $\downarrow$ 小- $\uparrow$ 大- $\downarrow$ 小- $\uparrow$ 大- $\downarrow$ 小- $\uparrow$ 大、という様に、交互にリズムを伴って変化している。



〒271-0047 千葉県松戸市西馬橋幸町41-506 日本サイ科学会発行

電話 047-347-3546 FAX 047-330-4091 E-mail office21@psij.mail-box.ne.jp

公式サイト <http://homepage3.nifty.com/PSIJ/> ML申し込み先 office21@psij.mail-box.ne.jp

## 念写像の形成過程の分析

佐々木 茂美 苗 鉄軍

### 1) はしがき

意識と体外にある物質とが、直接、相互作用し合う現象をPK(念力)という。別報では、通常現象に上乗せしてサイ現象を生起させる場合(メタル・バンド、念写)を取扱った。本報は、体外の局所に零場(零点)を作り、そこに未知現象を生起させる場合(例、念写、Thoughtography)について、検討することにした。

### 2) 気功師の実験

「気功」は主として身体(体内)の医学的な現象を取扱っており、「サイ科学(特異機能)」は精神的並びに体外の現象を取扱っている。しかし、基礎的な部分では共通性が多いと言えよう。中国では、林厚省師の気功治療中の「手の平」から変動リズムのある赤外線放出が、顧函森によって測定された(1977)。これが「気(サイ)」実験・科学研究の発端となり、中国や日本で実験が開始された。例えば、町好雄らはサーモグラフィーを用いて気功師と相手との間の「気」の相互作用を、画像によって可視化している(気を科学する、東京電機大出版、1993)。研究によると、触れずに、気功師の手の熱(血液流)が相手に伝達される傾向がある。経穴(ツボ)には血管や神経が無いのに、相手方の経穴部の皮膚がより敏感に反応して、高温になっている。放出される赤外線は極微弱な60~70 $\mu$ Watt程度であり、これ

が搬送波となって1.2Hz程度の気のシグナルと考えられる情報を上乗せしている。また外気放出時には1~5Hzの音も出ている、これは恐らく、血液が血管内を流れる時に、低周波音を生起させた為であろう、と言う。「気」放出へのスイッチは呼吸であり、気功師は呼吸を制御して、自律神経に働きかけている。一方、(-)方向変化(温度低下)の場合があり、さらに静電気や微弱な磁気を生起させる事も出来る等と報告している。この実験・観測結果の理由として、気は素粒子類似のエネルギーであり、皮膚や経穴(ツボ)を介して相手に伝達されたのでであろうと推定している。

河野貴美子らは気功師と相手の脳波を測定している(例、仲里誠毅、気の科学、ナツメ社、2010)。気功を始めると、 $\alpha$ 波が脳全体に広がるが、気功師の脳波は一般人よりも小さい。これは静気功の場合であり、知性や理性を薄める事に関係しているのでであろう、と筆者らは考えている。右脳で気をコントロールしているが、特に自律神経にかかわる前頭葉部分が活発化している。また気功師と相手の気功中の心拍数、血圧、脳波が同調・変動している、等と報告している。これらとほぼ同一傾向の結果を、筆者らも得ている。さらに、硬気功(武術)や念力(PK)として外気を放出する時には呼吸、心拍数、血圧も高まり、脳波の $\alpha$ 波も局部的に大になるのでであろう、と判断している。